



Title	田中裕教授を送るにあたって
Author(s)	信多, 純一
Citation	語文. 1981, 38, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68672
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



田中裕教授を送るにあたつて

田中裕先生は、昭和二十五年五月、大阪大学文学部創設と共に発足したばかりの国文学科助教授として、甲南高校より赴任され、以来三十年有余、かつて校庭に植えられた樹木の今や亭亭たることとく、国文学科を大きくお育てになり御退官の期を迎えるに至つた。その永き歳月の間、教育に研究に精励され、大学紛争に入るや学部長に推され、また人間科学部分離後の文学部緊急整備の重責をない、再度の学部長に乞われて御就任、美学科の増設、大学院日本学専攻設立に尽瘁され、その御退休の日を目前にされている。

先生の御退官をもつて、わが国文学科はその草創期を力を合せて乗りこえてこられた先生方すべてをお送りし、新たな世代に入ろうとする。その後を繼ぐ者の一人として、感慨また一人のものがあり、その任の重きを痛感している。

さて、今ここに先生を送るの辞を草するにあたつて、はたと筆が止り困惑しきつてゐる。それは、先生の下に十三年間、助教授をつとめてきた私であるが、先生のことについてはどれほども知らなかつたことに、今あらためて氣付いたからである。先生の学問について、またその人となりについて、実は何一つ存じ上げていらないことに愕然としている。転任直後、たちまち紛争に巻き込まれ、定期券をこれほど有効に使用したことのないほどに連日出勤し、深夜まで杯を手にお互いに語り合つたことである。しかし、今振り返つてみれば、一人の間で学問の話を交したことは皆無に等しいことを知る。さらに先生の人となりにしても、その奥深いところを何一つ把握していなかつたことに氣付くのである。

とは申せ、永いおつきあいの間に、その人となりの相の幾つかには触れ得たことは言うまでもない。先ず一番に先生は日常よく物忘れをなさる。今日の時間をお忘れになつてゐるのではないかと、研究室一同でよくやきもきしたことである。思索に耽り、遠くを見つめられて日常鎖事などに意を用いられない顎われであろう。それでは現実的でないのかと思うと、学部長として示されたその手腕の程はきわ立つたものがあり、総長候補にも再度推された記憶は今も事新しい。もともとこれは、先生の人柄のままに、人との出会いがあり、人に助けられ、時機を得られての、德分のなせるわざも大きかつたと思われる。

先生はまた、人前で話をしなければならないといったことを極端にいやがられる。また同じように人のそれを聞かされるのもいやのようである。国文の旅行などで土地の案内が始まると、ふいとその場を離れて邊を逍遙される。福井県平泉寺で、一老人が庫裡から現われ、求められずして説明を始めた時もそうであった。一人離れてかたわらを見る先生に老人の一喝がとんだ。これが先生御自身も今も話題にされる平泉澄氏とのなつかしい出会いであった。そうした先生の姿のかげに、私など先生のはじらい、人にすぐれた感覚の鋭さを感じ得する。人との関係、自他のことばに対する感覚が、先生をして居たたまれぬ思いにするのではなかろうか。

名著『中世文学論研究』の冒頭部に次のような箇所がある。「本稿の方法、手続についてあらかじめ言ふべきことはほとんどない。それは以下の具体的な考察と叙述とを通じて明らかにする、といふよりもむしろその過程で当面の対象の性質に準じて導き出し、かつ馴致してゆきたい」と思つてゐる」とあるこの「馴致」ということばに、まさに先生獨得の世界を垣間見る思いがする。中世の思想的高峰に位置する人々の藝術論、美的世界を終始正攻法で追いやられ、その論に沈潜し、その表現の微妙のひだに分け入つてゆかれる先生獨自の學問に、まさに相應しいことばと感じる。この書中用いられている外来語はほんの数例に過ぎないが、それが「らじかるな方向」「学説のぶらいおりつい」と圈点付きの平仮名表記されているのを見たる時、先生のきびしさと繊細な感覚、さらにはその使用に際してのはじらいの念さえ感じ取られ、肅然と襟を正す思いがする。

先生のきびしさ、勁さはつとに全學的に鳴り響いてゐる。紛争時、深夜の団交の壇上に只一人崩れを見せぬ先生の姿に、古武士の面影を重ね見た。しかし、同時に人なつっこい、全く邪氣のないその笑い顔に、先生のやさしさを端的に見るであらう。

思えば、先生を知るためには、先生の深さに至らねばならぬ隘路のあることを知る。自由に逍遙される幽邃の林は、容易に踏み込み得ぬ世界であり、所詮私などの到底及ぶことの出来ない幽幽遼遠の境であった。受講生もその學問を繼承することはきわめて難しく、その衣鉢を継ぐ者はいまだ皆無に等しい。ただ、それぞれが先生の無言のお姿から學問の姿勢を体得するのみである。

先生が澄んだ目で見つめられるその永遠の世界にも似て、いつまでもみずみずしい先生に、先生が私と同じ立場で過去數回御退官の先生方に捧げられた「南山之寿」の頌詞を、「南山」において、南山の如き寿を時とわに保たれんことをお祈りするの意に重ね用いて、ここに捧げさせていただく。